序

高橋秀寿先生には、2023年3月をもって定年の期を迎えられます。立命館大学人文学会は、先生のこれまでの御功績を称え、そして深い感謝の意を表すため、ここに退職記念の論集を編んで献呈させていただくこととしました。

高橋先生は、1981年3月に立命館大学文学部史学科西洋史学専攻をご卒業後、1985年3月に同大学大学院文学研究科博士課程前期課程史学専攻を修了され、1988年3月に同後期課程を単位取得退学されました。同年6月から1991年3月までドイツのケルン大学に留学され、1999年9月には立命館大学で博士号を取得されています。そして1998年4月より立命館大学文学部に助教授として着任され、2000年4月には同教授となられました。以来、西洋史学専攻でドイツ史の中心的な役割を担う先生として活躍されてきました。学内行政でもご貢献いただいており、専攻主任のほかに、2014年2月より2018年度末まで国際言語文化研究所の所長として国際分野での研究促進につとめられています。

先生のご専門はドイツ現代史です。著書は戦後ドイツ人のナチズムの時代や第二次世界大戦、ホロコーストの記憶についての分析をめぐるものが中心で、別紙にあるように多数です。先生のこの意欲的な研究の原動力となったのが、ケルン大学への留学だったそうです。留学時にちょうどベルリンの壁が崩壊し、革命時の東欧を旅行し、総選挙の政治演説会で暗殺未遂事件に遭遇され、当時の激動のドイツ・東欧を肌で感じられたそうです。そしてその経験についてドイツの友人や先生、旅先で出会った人々と議論されたことが先生にとって重要だったのではないでしょうか。ヨーロッパ・イスラーム史専攻のホームページによると、先生はこれらの実体験からご自分の生きている「現代」がそれまでの近代社会とは異なる特質と課題を持っているという意識をもたれ、「現代」がいつ始まり、どういう政治形態であるべきかというテーマを、ドイツ現代社会にいたる歴史的変遷を題材にして論じられるようになったのです。先生が着々とそして貪欲にこのテーマについて研究を進められてきたことは、別紙の研究業績にあるとおりです。

2023年 1月20日には先生の退職記念講演がとりおこなわれました。多くの文学部教員も出席しており、それは先生の研究に対する敬意が示されたのだと思います。一方でこの講演会は、研究面でうけるのとは異なる、まさに先生のお人柄が現れる機会でもありました。ふだんの先生は自由でおおらかで気さくな方です。講演でご自分の研究について、前段落にあるようなお話を軽快にされ、「自慢話かな」とおっしゃっても、けっしてそうは聞こえず、なごやかな雰囲気の場となりました。そして講演終了後には、教え子の皆さんが次から次へとサプライズで花束やプレゼントを贈呈され、前列の机はそれらで山積みになりました。ご自分の研究にのみではなく、学生の指導にも積極的であったことが伝わってきました。

これまで教育・研究で活躍され、また数多くの優秀な教育者・研究者を育成されてきた高橋秀寿先生は、2023年4月からは特任教授として、引き続きしばらく教鞭をとってくださるとのこと、感謝申し上げます。また退職記念講演で自らこれが最後だとは思いたくな

いとおっしゃっていたように、まだまだ研究で成果をあげられるものと期待しております。
先生には、今後とも、立命館大学、文学部・文学研究科へのご鞭撻を賜ることができれば幸いです。

2023年1月

立命館大学
文学部長　中　川　優　子